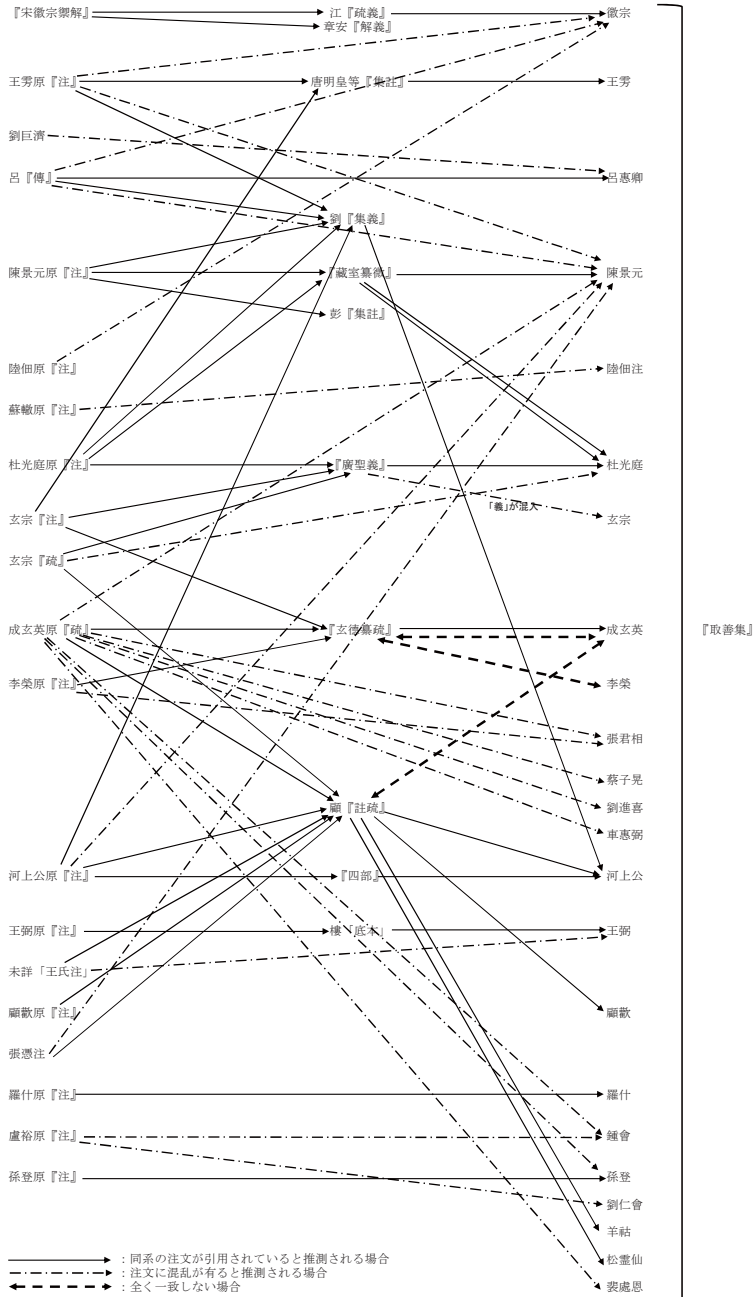


『道德眞經取善集』所引諸注關係図



- (13) 一部が焦『老子翼』所引と一致する。
- (14) 『郡齋讀書志』は「三十家注老子八卷」として、ほぼ同内容を「唐蜀郡岷山道士張君相集」（『郡齋讀書志校證』 p.464）と記す。
- (15) 例えば、劉玲娣「顧歡注老佚文略考」（『湖北師範學院學報（哲學社會科學版）』第31卷第5期所収、2011年）は『取善集』所引「顧曰」を顧歡注と断定し、梅野茂「傳顧歆『道德眞經注疏』所引の『老子注』・『老子疏』（『汲古』第44号。汲古書院、2003年。後に同氏「羅什『老子注』の研究』収録。三恵社、2015年）も大筋で顧歡注と認めている。
- (16) 藤原高男「劉進喜・蔡子晃・車玄弼の道德經注について」（『香川大学教育学部研究報告（第一部）』49号、1980年）は、これらの一致を思想上の共通性と見做すが、本稿では文献上の混乱と見做す立場を取る。
- (17) 樓宇烈校釈『老子道德經注』。
- (18) 例えば、梅野茂「傳顧歆『道德眞經注疏』所引の『老子注』・『老子疏』」は、顧『註疏』が引く「王曰」は唐・王顧の疏であって、王弼の注ではないとする（上掲著 p.付27）。尚、王弼注のテキスト問題に就いては、蔣麗梅『王弼《老子注》研究』（中国社会科学出版社、2012年）の第二章を参照。
- (19) 『嘉興藏』第36冊所収、No. B351。尚、前掲梅野氏著は羅什注についての整理がなされている（pp.16～20）。
- (20) 『老子翼』・『順珠』は本章を六十八章とする点でも一致している。『藏室纂微』は六十六章とする。
- (21) 本図はあくまでも相互関係の全体的イメージを示すことを目的としたものであり、厳密な意味での関係図ではないことに留意されたい。

※本稿は、平成28～30年度科学研究費助成事業「金朝初・中期道家道教思想の解明」（課題番号：16K02159）の成果の一部である。

【追記】

本稿脱稿の後、2016年9月20日に東北大学（仙台）で挙行された「応用科学史学研究会第16回研究集会」（代表：三浦秀一 東北大学教授）に於ける拙報告「注釈資料から見る金朝道家・道教思想史」に対して、三浦先生より、劉允升「序」では『取善集』は「六卷」となっているが、『道藏』所収本では「十二卷」となっている、とのご指摘を頂いた。この問題に就いては別の機会に改めて検討したいと考えているが、この場を借りてご指摘に深謝申し上げます。

藤原高男の一連の論考の他、尹志華『北宋「老子」注研究』〔附録：輯校王雱『老子注』〕（巴蜀書社、2004年）、樓宇烈校釈『老子道德經注』（中華書局、2011年）、樊波成『老子指歸校箋』（上海古籍出版社、2013年）等がある。

- (3) 拙稿「李霖：《道德眞經取善集》思想初探」（程水金主編《正學》第四輯所収。江西人民出版社、2016年）を参照。
- (4) 『太平寰宇記』卷六十三「河北道十二・深州・饒陽縣」（中國古代地理總志叢刊『太平寰宇記』、中華書局、2007年標点本。p.1292）。金朝に於ける行政区画及び饒陽に就いては、李昌憲『金代行政区劃史』（上海古籍出版社、2015年。p.174, p.189, p.201, p.294）を参照。
- (5) 例えば、三浦秀一『中国心学の稜線—元朝知識人と儒仏道三教』（研文出版、2003年）は、金初、河北饒陽に居残った北宋遺老としての李霖の注釈と見做す（p.258）。
- (6) その他、『道德經』各章の末尾に記載されている無名氏の章全体に対する総括注の撰者が李暎と推測される点は、注(3)拙稿で指摘した。
- (7) 『道藏』所収文献の出処は巻数／葉数表裏／行数を「12/03a/24」等と表記した。尚、煩瑣を避けるため、『取』以外の文献で、『道德經』の章数が明確な事例は出処の表記を略した。本論で多用する文献の略称は以下の通り。王弼『道德眞經註』（王『註』）、河公上『道德眞經註』（河『註』）、『四部叢刊初編』所収河公上『道德眞經註』（『四部』）、玄宗『唐玄宗御註道德眞經』（玄宗『御註』）、玄宗『唐玄宗御製道德眞經疏』（玄宗『御疏』）、杜光庭『道德眞經廣聖義』（『廣聖義』）、強思齊『道德眞經玄徳纂疏』（『玄徳纂疏』）、陳景元『道德眞經藏室纂微篇』（『藏室纂微』）、呂惠卿『道德眞經傳』（呂『傳』）、明皇撰・張氏集注『道德眞經集註』（唐明皇等『集註』）、蘇轍『道德眞經注』（蘇『註』）、徽宗『宋徽宗禦解道德眞經』（『宋徽宗禦解』）、章安『宋徽宗道德眞經解義』（章安『解義』）、江濶『道德眞經疏義』（江『疏義』）、顧歡『道德眞經註疏』（顧『註疏』）、趙秉文『道德眞經集解』（趙『集解』）、彭耜『道德眞經集註』（彭『集註』）、董思靖『道德眞經集解』（董『集解』）、劉惟永『道德眞經集義』（劉『集義』）、危大有『道德眞經集義』（危『集義』）、焦煥『老子翼』（焦『老子翼』）、德玉順硃『道德眞經硃』（『順硃』）。
- (8) Kristofer Schipper & Franciscus Verellen. 道藏通考 The Taoist Canon : A Historical Companion to the *Daozang*. The University of Chicago Press, 2004. (p.649).
- (9) 「唐氏字說解一百二十卷」（孫猛校註『郡齋讀書志校證』、上海古籍出版社、1990年。p.166）、「唐耜字說集解三十冊〔卷七〕」（『宋史』「藝文一」、中華書局、1985年。p.5075）。
- (10) 張宗祥輯録・曹錦炎点校『王安石「字說」輯』（福建人民出版社、2005年）には、これら『道德經』注釈が引く「字說」佚文は輯録されていない。
- (11) 以下の例にも明らかであるが、引用注の冒頭或は末尾に李霖が自身の句を補足する例は多い。
- (12) 『藏室纂微』のテキスト問題に就いては、拙著『宋代道家思想史研究』「第一篇第四章 碧虛子陳景元の思想—『道德經』注を中心に—」（汲古書院、2012年）を参照されたい。

倦也（『取』第五十二章「開其兌、濟其事、終身不救」08/17b/06）

本條は顧『註疏』が「注」（05/22a/10）として引くものと完全に一致する。

結語

以上の検証は、『取』所引注文と対校資料との間の差異が顕著な例を中心としたため、『取』の特異性のみが目立つ結果となったが、本論で言及しなかった引用諸注の大半は基本的に原典と一致している。『取』が引く諸注の相互関係を図示したのが、本論末に掲載した図である。⁽²¹⁾「-----▶」は注文の引用に混乱が見られる事例であり、「-----▶」が多く集中している注文テキストとして不安定であることを示す。これに明らかな様に、北宋期の注釈は概ね資料として安定しているが、陳景元『藏室纂微』はテキストに問題が有る。『藏室纂微』に就いては、『取』所引注のみに見られた字句が李霖の付加挿入であるのか、陳注自体の乱れによるものなのか判断に苦しむ。唐・六朝と遡るにつれ、『取』所引注文の乱れが目立つ。特に、成玄英疏と他注文との間の混乱が多い。この点は、「成疏」と目されているものが眞実「成疏」であるのかも含み、再考の必要が有るであろう。

引用注の冒頭・末尾に自身の注釈を付加する傾向の有る『取』だが、引用注文の内容と原典との間に違いが有る場合でも、その多くが李霖の引用ミスというよりは、李霖が依拠したテキストの問題であることも本論では確認することが出来た。それらも含めて、当時の河北に於ける『道德經』注釈受容の一具体的状況を示していると言えよう。

(注)

- (1) 『玄都寶藏』に就いては、陳國符『道藏源流考（新修訂版）』「歴代道書目及道藏之纂修與鏤板」の「金孫明道刊大金玄都寶藏」及び「金代各處道藏」（中華書局、2014年）、尾崎正治「金・玄都寶藏私考」（中村璋八編『中国人と道教』所収。汲古書院、1998年）、張強「開鑿石窟與續修道藏—宋德方對金末元初全真道發展的貢獻」（『東岳論叢』第31卷第4期、2010年）、劉華「『道藏』的編纂及史料研究價值」（『圖書情報工作網刊』2011年第12期）、趙衛東「茅山乾元觀『道藏』抄本流傳山東考」（『宗教學研究』2013年第1期）等を参照。
- (2) 『取』を材料とした「校本」の代表的なものには、蒙文通（『蒙文通文集 [第六卷] 道書輯校十種』所収。巴蜀書社、2001年。後に、『蒙文通全集 五 道教甄微』に再録。巴蜀書社、2015年）、嚴靈峯（『無求備齋老子集成初編』所収。藝文印書館、1965年）、

顧『註疏』が同章の「天網恢恢、疏而不漏」の注に「盧曰」(08/05b/09)として引く注文と一致する。劉仁會注と盧裕注の間に混乱が生じていることが窺える。

(九)、羊祐

『廣聖義』「序」が「晋僕射太山羊祐 [字叔子。注爲四卷]」(序/02b/07)と記し、晋人と目される。『取』は三條引用し、その内の一條の対校が可能である。

羊祐曰、明非所樂也(『取』第三十一章「殺人衆多、以悲哀泣之」05/15a/04) 顧『註疏』が「疏」(03/36a/04)と引く注文の末尾と一致する。

(十)、松靈仙

『廣聖義』「序」は「松靈仙人 [隱青溪山、無名氏年代]」(序/03a/03)と時代不明と記すが、董『集解』は「後魏、盧景裕・劉仁會。南齊、顧歡・松靈仙人。秦、杜弼。宋、張憑……」(序説/03a/01)と記し、南齊人である可能性が窺える。『取』は四條引くが、その内の二條の対校が可能である。

靈仙曰、道無不通名善事、無不達爲士。前章執古御今、此則御今引古(『取』第十五章「古之善爲士者、微妙玄通、深不可識」03/05a/03)

本條は、『玄德纂疏』が「成疏」(04/19b/07)、顧『註疏』が「疏」(02/11b/06)として引くものと一致する。

松靈仙曰、足、充足也。復者、反歸也。樸者、眞本也。始自知雄、終乎守辱。三行既備、爲道之要。又如虛谷罄無所容、所以常道上德、於是乃足。故得反歸眞空、與道合體。故云、復歸於樸(『取』第二十八章「復歸於樸」05/04/07)

本條も『玄德纂疏』が「成疏」(07/31a/02)と、顧『註疏』が「疏」(03/26a/02)として引くものと一致する。成玄英疏と松靈仙注との間に混乱が生じている可能性がある。

(十一)、裴處恩

『廣聖義』「序」が「晋人河東裴楚恩 [注二卷]」(序/03a/03)と記し、晋人と目される。『取』は二條引き、その内一條の対校が可能である。

裴處恩曰、開其五欲之門、濟其六塵之事、心神内疲、耳目外困、終身勞

想される。

(六)、盧裕

『廣聖義』「序」が「范陽盧裕〔後魏國子博士。一名白頭翁。注二卷〕」（序/03a/01）と記すことから、後魏の人物と目される。『取』は九條引用するが、その内の一條の対校が可能である。

盧裕曰、久、長久也。謂、量等太虛、無來無去、心冥至極、不生不滅、冥混自然、不可分別。既與此理契會、義說爲久（『取』第十六章「道乃久」03/14a/02）

本條の架線部は、『玄德纂疏』所引「成疏」（04/34b/05）、顧『註疏』所引「疏」（02/20b/02）と一致し、テキスト上の混乱が予想される。『取』所引冒頭の「久、長久也」、末尾の「冥混自然、不可分別」は『玄德纂疏』、顧『註疏』所引には見られない。

(七)、孫登

『廣聖義』「序」が「隱士孫登〔字公和魏文明二帝時人〕」（序/02b/07）と記し、魏の文・明帝期の人物と目される。『取』は三條引用し、二條の対校が可能である。

孫登曰、不能歸根守靜、則天命失常、是其凶也（『取』第十六章「不知常、妄作凶」03/12b/05）

本條は、顧『註疏』が「孫曰……」（02/19a/06）と引くものと一致する。

孫登曰、九重之臺、起於累土。百仞之高、元乎一簣。以況尊貴卑下爲基（『取』第三十九章「故貴以賤爲本、高以下爲基」06/11b/01）

本注は、『玄德纂疏』が「成疏」（11/23b/10）として引く注文の後半部分と一致する。成玄英注と孫登注との混乱が見て取れる。

(八)、劉仁會

『廣聖義』「序」が「草萊臣劉仁會〔後魏伊州梁縣人。注二卷〕」（序/03a/01）と記し、後魏の人物と目される。『取』は五條引用するが、その内の一條の対校が可能である。

劉仁會曰、寂寞無聲、故曰不言。有感則報、故言善應（『取』第七十三章「不言而善應」11/23a/08）

『取』の他に羅什注を引用するのは顧『註疏』、趙学士『道德眞經集解』、焦『老子翼』だが、仏藏では清・徳玉順硃『道德經順硃』が引く。『取』は十三條引用するが、対校可能なものは以下の三條のみである。

羅什曰、妙理常存、名爲有物。萬道不能分、故曰混成（『取』第二十五章「有物混成、先天地生」04/13b/06）

本條は焦『老子翼』（02/12a/06）・『順硃』（『嘉興藏』第36-516c19）所引とほぼ一致する。『取』が羅什注を引かない三十三章・三十七章でも焦『老子翼』（02/23b/05、02/27a/08）は羅什注を引き、それは『順硃』（518a24、518c06）所引と一致する。『順硃』は焦『老子翼』に依るものであろう。その三十三章注は趙『集解』（02/18b/06）所引と一致し、三十七章は顧『註疏』（04/01b/09）所引と一致する。これ等から、羅什その人の真筆かどうかは別として、「羅什注」としてこれらの注文が流通していたことが確認出来る。

羅什曰、損之者、無麤而不遣、遣之至乎忘惡。然後無細而不去、去之至乎忘善。惡者非也、善者是也。既損其非、又損其是、故曰損之又損。是非俱忘、情欲既斷、徳與道合、至於無爲。已雖無爲、任萬物之自爲、故無不爲也（『取』第四十八章「無爲而無不爲」08/04b/03）

本條は、『藏室纂微』（07/06b/03）の地の文とほぼ同じであり、『取』所引には省略された個所が見られる。『藏室纂微』は注釈者名を明示していないが、羅什注に基づいていると思われる。

羅什曰、心形既空、孰能與無物者爭（『取』第六十六章「以其不爭故天下莫能與之爭」11/2b/03）

焦『老子翼』（04/08b/01）・『順硃』（523b28）所引が『取』所引と一致し、『藏室纂微』（09/09a/09）はやはり地の文として述べている。⁽²⁰⁾

（五）、鍾會

『廣聖義』「序」が「潁川鍾會〔字士季魏明帝時人〕」（序/02b/06）と記すことから、魏・明帝期の人物と目される。『取』は九條引用するが、その内の一條の対校が可能である。

鍾會曰、致、至也。除情慮、至虛極也。心常寂、守靜篤也（『取』第十六章「致虛極、守靜篤」03/10a/05）

本條は、顧『註疏』が「盧曰……」（02/16b/06）として引くものと一致し、顧『註疏』は「盧裕注」と見做していることが分かる。テキスト上の混乱が予

王弼曰、爲政之善、無穢無偏、如水之治、至清至平（『取』第八章「政善治」02/3b/01）

本注は、「樓底本」・王『註』及び劉『集義』所引と一致しない。唐明皇等『集注』は該当個所で王注は引用していない。「樓底本」は「不知何本」（p.22注2）とする。

王弼曰、古今雖異、其道常存。執之者方能御物（『取』第十四章「執古之道、以御今之有」03/03b/08）

本注は、「樓底本」・王『註』及び唐明皇等『集注』所引と一致しない。「樓底本」は「與各本均異、不知所本」（p.36注4）とする。しかし、本條は顧『註疏』が「疏……王曰……」（02/11a/04）と引くものとはほぼ一致し、「王曰／王弼曰」として本條注が流通していたことが窺える。

王弼曰、藏精匿炤、外不異物、混同波塵、故曰若濁（『取』第十五章「渾兮、其若濁」03/07b/05）

本注は、「樓底本」・王『註』と一致しない。「樓底本」は「疑非王弼注文」（p.38注7）と述べる。しかし、本條も顧『註疏』が「王曰……」（02/15a/03）と引くものとはほぼ一致し、「王曰／王弼曰」として本條注も流通していたことが窺える。

最後の二條が標準的王弼注に見られないことから、顧『註疏』が引く「王曰」は王弼注ではないとの見解が有るが⁽¹⁸⁾、しかし、その数は限られており、又、『取』がそれを「王弼注」として引くことから、これらが時代に在っては「王弼注」として流通していたと見做すべきである。その点で、『取』所引と顧『註疏』所引は同系であると言える。

（三）、顧歡

六朝以前で三番目に多いのが顧歡注である。顧『註疏』自体は後代の仮託である。『取』所引顧歡注の二例は顧『註疏』と一致するが、その他は顧『註疏』に同一注文を確認出来ない。『取』が依拠したテキストと、顧『註疏』が依拠したテキストとは異なる系統であることが考えられる。

（四）、羅什

鳩摩羅什注は『廣聖義』が「沙門羅什〔本西胡人。苻堅時自玉門關入中國。注二卷〕」（序/02b/08）と記し、羅什に「注二卷」が有ったとされている。

本條は、『四部』及び顧『註疏』・『玄德纂疏』・唐明皇等『集註』所引はほぼ一致するが、『取』所引注はこれらとは異なり、河『註』も孤立している。本條の内容は、褚伯秀『南華眞經義海纂微』が引く陳詳道注「左陽主生、故左臂言爲雞。右陰主殺、故右臂言爲彈」(17/10b/03)と完全に一致しており、河上公注としては問題が残る。

河上公曰、人所以生者、以有精神。精神託空虛、喜清靜。飲食不節、忽道念色、邪辟滿腹、爲伐命散神也(『取』第七十二章「無厭其所生」11/18b/06)

「精神」の語が二回繰り返されているのは、『取』所引と顧『註疏』所引のみで、両者が共通のテキストに基づいていることが考えられる。

河上公曰、舌柔齒剛、齒先舌亡。水能滅火、陰能消陽。知柔弱者久長、剛強者折傷、恥謙卑、好強梁(『取』第七十八章「故柔勝剛、弱勝強、天下莫不知、莫能行」12/08a/06)

『取』所引は河『註』とほぼ同文だが、これ等以外では「水能滅火、陰能銷陽、舌柔齒剛、齒先舌亡」と句の順が入れ替わっている。

河上公注は、河『註』の特殊な例を除くと、その他はほぼ同系統の注文が引用されていると言え、テキストとしては安定していたと言える。又、『取』所引が他注釈所引と異なる場合でも、同じ内容の注文を他に確認出来ることから、『取』には基づいたテキストがあったことが分かる。

(二)、王弼

河上公注の次に引用数が多いのは王弼注である。王『註』及び唐明皇等『集註』・劉『集義』・『藏室纂微』・彭『集注』・趙『集解』所引により対校が可能である。暫時、樓宇烈校釈『老子道德經注』所収校本(以下「樓底本」と略す)を底本とする⁽¹⁷⁾。『取』所引王弼注は「樓底本」から窺い得る標準的テキストとほぼ一致する。しかし、『取』が引く以下の四條は、標準的テキストには見られず、テキスト上の混乱が窺える。

王弼曰、若不法天地之虛靜、同橐籥之無心、動不從感、言不會機、動與事乖、故曰、數窮。不如內懷道德、抱一不移、故曰守中(『取』第五章「多言數窮、不如守中」01/18a/07)

本注は、「樓底本」・王『註』及び唐明皇等『集註』・劉『集義』所引と一致しない。「樓底本」は「疑非王弼注文」(p.17注17)とする。

しているのは、蔡子晃と同様に、テキスト上の混乱が生じていると疑われる。

(八)、車惠弼

車惠弼は七條引かれているが、対校が可能なのは以下のみである。

車惠弼曰、修身者、必須以有資空、以空導有、有無資導、心不偏溺、故成人之利用（『取』第十一章「故有之以爲利、無之以爲用」02/13a/05）

車惠弼曰、同化陰陽、安立天地、亭毒羣品、子育含靈、生之畜之、可以爲母（『取』第二十五章「可以爲天下母」04/14b/07）

車惠弼曰、行人虚懷内靜、不馳心於世俗、末役思於攀縁、以眞炤僞、事無不悉也（『取』第四十七章「不出戸、知天下、不窺牖、見天道」08/01a/05）

この三條の全てが『玄德纂疏』所引「成疏」（03/19b/01、07/03b/07、13/07b/08）及び顧『註疏』所引「疏」（01/24b/07、03/14a/04、05/06a/07）とほぼ一致する。三條目末尾の「末役思於攀縁～」の句は他に見られず、李霖のコメントの可能性が高い。『取』が「車惠弼曰」として引く注文が成疏と一致するのは、先の蔡子晃・劉進喜の場合と同様に、テキスト上の混乱が原因していると考えられ、⁽¹⁶⁾ 使用には注意が必要である。

四、六朝以前

(一)、河上公

六朝以前の注釈で引用数が最も多いのは河上公注である。河『註』・『四部』及び顧『註疏』・『玄德纂疏』・唐明皇等『集注』・彭『集注』・危『集義』・『藏室纂微』・劉『集義』所引による対校が可能である。『取』所引は『四部』・唐明皇等『集注』所引とよく一致し、これらは同系である。一方、『藏室纂微』所引、及びそれを襲う彭『集注』所引は『取』所引と一致箇所が少なく、同一正文に対する注文も多く異なる。更に、河『註』の注文は特殊であり、他と異なる場合が少なくない。

河上公曰、左陽主生、右陰主殺（『取』第三十一章「吉事尚左、凶事尚右」05/14b/05）

注と考えることが出来ないことを示す。⁽¹⁵⁾

「張君相曰」の内容が李榮注と一致している点は、上述「藏書志」に李榮の名は見られないものの、実は李榮注も張君相「集注」に含まれていたのか、或は、後世、李榮注が「集注」に加えられ、『取』はそれを「張君相曰」として引用したことが考えられる。

(六)、蔡子晃

『取』は蔡子晃注を八條引くが、対校可能なのは一條のみである。

蔡子晃曰、有爲躁競、執教生迷、名爲失。既爲同失、不能虚心冥會、而言道失者、獨失道也（『取』第二十三章「失者同於失」04/10b/03）

本條と同文を、『玄德纂疏』は「成玄英疏」（06/20b/03）と、顧『註疏』は「疏」（03/10b/02）として引く。『取』は全体的に省略が見られるが、蔡子晃注と成疏とが全く同文なのは、成疏と蔡子晃注の間にテキスト上に混乱が生じていたことを疑わせる。

(七)、劉進喜

劉進喜注は八條引かれているが、対校可能なのは以下の通りである。

劉進喜曰、匠成萬物、鑪錘羣生、有大功巧而忘功用、晦迹同凡、故曰拙也（『取』第四十五章「大巧若拙」07/23a/01）

劉進喜曰、百姓者衆人之總稱也。然聖人無心、有感斯應、應隨物感、故以百姓爲心。既無心、應亦無不應（『取』第四十九章「聖人無常心、以百姓心爲心」08/06b/06）

劉進喜曰、小國用柔者、更無餘心、不過欲入大國之中、慕德接事（『取』第六十一章「小國不過欲入事人」10/06b/05）

劉進喜曰、保養眞性、不輕染欲、自愛也。謙卑靜退、先物後己、不自貴也（『取』第七十二章「是以聖人自知不自見、自愛不自貴」11/20a/06）

これ等四條全てが、『玄德纂疏』所引「成疏」（12/31a/02、13/17a/05、16/15b/01、18/20b/10）及び顧『註疏』所引「疏」（05/02b/02、05/10a/06、06/19b/08、08/03a/02）とほぼ一致する。『取』が「劉進喜曰」として引く注文が、成疏とほぼ一致

「萬物得一以生」06/09a/10)

本條とほぼ同文を『玄德纂疏』は「成疏」(11/18a/10)として、顧『註疏』は「疏」(04/10b/07)として引く。同様の例は、

張君相曰、前境美麗、稱可欲心、故言可欲。然境能適心、是起罪之緣。
緣境不止、必獲大罪（『取』第四十六章「罪莫大於可欲」07/25a/03）

本條とほぼ同文を『玄德纂疏』は「成疏」(13/04b/03)として、顧『註疏』は「疏」(05/05a/05)として引く。本條末尾の「緣境不止、必獲大罪」の句は、『玄德纂疏』・顧『註疏』所引には見られず、李霖のコメントの可能性が高い。この二條は、張君相「集注」が引く成疏を「張君相曰」として李霖が引用したと考えられる。

張君相曰、順道無違曰柔、始終不損曰強（『取』第五十二章「守柔曰強」08/18a/05）

張君相曰、兵由彼起、我實不行、應物而動、雖行無行（『取』第六十九章「是謂行無行」11/12a/01）

此の二條は『玄德纂疏』が「李榮注」(14/21a/03、18/04a/02)として引くものと同文である。又、

張君相曰、用弓之道、高者恐過、故抑之、令不高。下者不及、故舉之、令不下。不下不高、中前期也。爲行之道、亦務中平。太高則衆所不容、傷下則非議所聚。抑高舉下、合理源也（『取』第七十七章「天之道其猶張弓乎……不足者與之」12/06a/05）

本條前半下線部は『玄德纂疏』が「李榮注」(19/23a/07)として引く注文とほぼ一致する。「爲行之道～」以下は『玄德纂疏』所引「李榮注」と完全に一致はしないが、『玄德纂疏』の内容に李霖が整理を加えたと見做せなくもない。

張君相曰、兵以討逆、武以靜亂。上既行道、下乃好德、自然從化、何事陳兵。内明舟輿以喻小乘、甲兵以喻小智。行人心安、實相廢而不用（『取』第八十章「雖有舟輿、無所乘之、雖有甲兵、無所陳之」12/14a/07）

本條は『玄德纂疏』所引「李榮注」(20/15b/02)及び顧『註疏』八十一章所引「顧曰」(08/26a/01)と一致する。本條末尾の「内明舟輿以喻小乘～」以下は『取』のみに見られ、李霖が付加した可能性が高い。顧『註疏』が「顧曰」として引くものと一致している点は、顧『註疏』の「顧曰」を無批判に顧歡

文が混入したものであろう。

杜光庭曰、聖人愛民恤物、巨細申恩、若可名於小矣。任物隨性歸於天、
又可名於大矣（『取』第三十四章「是以聖人終不爲大、故能成其大」05/25b/04）
『廣聖義』・『藏室纂微』所引と比べると、『廣聖義』には「聖人之理天下也、
愛民恤物」（28/07a/05）と、「之理天下也」の句が有る。この句を略す点で、
『取』と『藏室纂微』は一致する。その他の細かい差異も含め、『藏室纂微』
所引注文は『取』所引に近く、両者が同系の注釈に基づいていることが窺える。
類似の例は、

杜光庭曰、司、主也。……天有司命四司之星、在虛危之間、人星之側、
以司於人。此四司星者、三元經所謂、天之司殺也（『取』第七十四章「常
有司殺者殺」1125b/06）

冒頭「司主也」の句は『廣聖義』には無いが、『藏室纂微』所引には有る。
「司、主也」の句は同章の玄宗「疏」に見られ、『取』と『藏室纂微』所引に
は、これが紛れ込んだ可能性が窺える。又、「以司於人」と「此四司星者」
の間に本来は有る『廣聖義』の句を『取』と『藏室纂微』所引では省略して
いる。

『取』が引く杜光庭「義」は『廣聖義』所引と一致する場合が多いが、李
霖が省略加筆している個所も少なくない。更に、『取』所引は『藏室纂微篇』
所引と近い事例を確認出来、両者が同系のテキストに依拠していることが考
えられる。そのテキストの一部には玄宗「疏」が混入されている疑いが見ら
れ、テキストとしてはやや混乱していると言える。

（五）、張君相

「張君相」は、『廣聖義』が「岷山道士張君相〔作集解四卷〕」（序/04a/04）
と記し、北宋末の藏書家・董道「藏書志」も「廣川董道藏書志云、……又
云、唐道士張道相集注道德經七卷、凡三十家。其名存者、河上公、節解嚴
遵、王弼、何晏、郭象、鍾會、孫登、羊祜、鳩摩羅什、盧景裕、劉仁會、顧
權、陶弘景、松靈、裴處思、杜弼、張憑、張嗣、臧玄靜、孟安期、孟智周、
竇畧、宋文明、褚柔、劉進喜、蔡子晃、成玄英、車惠弼」（彭『集註』「雜說」
上/02a/03）と記す。『取』は「張君相曰」と称して張君相自身の注を引用す
ると同時に、張君相「集注」が引く他注も引用している可能性が窺える。

張君相曰、有識無情、總號萬物、同稟一道、以得生成（『取』第三十九章

成玄英曰、吉謂朝禮、凶謂喪禮（『取』第三十一章「吉事尚左凶事尚右」05/14b/04）

成玄英曰、此明三毒不能傷害。若攝生無生、則害不能害。既内無三毒、則外三毒不傷。是以陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵也。何者、夫虎主嘯、兕主癡、兵主貪（『取』第五十章「陸行不遇兕虎、入軍不被甲兵」08/11a/07）

成玄英曰、幾盡也。輕敵則好勇而不慈、廣貪而失儉、好進而不退、盡失前三寶（『取』第六十九章「輕敵則幾喪吾寶」11/13a/01）

この三條は、『玄德纂疏』（08/19a/08、14/06b/05、18/06b/01）・顧『註疏』（03/35a/01、05/14b/10、07/15a/05）所引とは全く異なり、一方、『玄德纂疏』所引と顧『註疏』所引とはほぼ一致している。この様に『玄德纂疏』と顧『註疏』が引く成疏がほぼ一致し、それらと『取』所引との間に字句の違いがある例が幾つか確認され、成玄英注釈のテキストとしての不安定さが窺える。

（三）、李榮

『取』は後半巻のみで李榮注を引用し、一方、『道藏』所収李榮『道德眞經註』は「道經」部分のみを残すため、両者間の対校は不可能である。『玄德纂疏』所引を材料に一條のみを示すと、

李榮曰、身形是成道之本、故爲親。名聞是虛假之法、故爲疎。世人不能爲身以損名、只爲名以損身（『取』第四十四章「名與身孰親、身與貨孰多」07/18a/03）

本注該当個所で『玄德纂疏』が引く「榮曰」（12/23b/02）は『取』所引とは全く異なる。この他、『取』所引と『玄德纂疏』所引とでは細かい文字の違いが散見し、テキストとしての安定性に問題があると考えられる。

（四）、杜光庭

杜光庭の注釈は、『廣聖義』の他、『藏室纂微』・劉『集義』が引く。

杜光庭曰、榮尊榮也、辱卑辱也。人君富有八極、君臨九圍、是尊榮也。

自稱孤寡不殺、是卑辱也（『取』第二十八章「知其榮、守其辱」05/03b/02）

架線部は『廣聖義』には見られず、『廣聖義』が同章で引く玄宗「疏」の冒頭に見られる。恐らくは、『廣聖義』の「義」の前に引かれる玄宗「疏」の

『廣聖義』・董『集解』等が引用する。同じ御注である徽宗注と比較すると、玄宗の場合は諸テキスト間の文字の異同が多く、それは当時の流布状況を反映したものと考えられる。

唐明皇曰、義者裁非之謂、謂爲裁非之義、故云爲之。有以裁非斷割、令得其宜、故云而有以爲。此則心迹俱有爲也（『取』第三十八章「上義爲之而有以爲」06/04b/08）

「謂」を玄宗『御注』・『廣聖義』所引は「義」とし、『玄德纂疏』・唐明皇等『集註』所引は『取』と同様に「謂」とする。このことは、『取』所引が玄宗『御注』等と異なる場合でも、『取』には依拠したテキストが有ること示す。同様の例は第三十八章注文の「瀉」（『取』06/07a/02）を玄宗『御注』及び唐明皇等『集註』・顧『註疏』所引が「醜」とし、『玄德纂疏』・『廣聖義』所引が『取』と同様に「瀉」とする例にも窺える。

唐明皇曰、以用也、賊害也。人君任用多智之臣、使令理國、智多必作法、法出則姦生、令下則詐起國家、所以滋昏而爲國之賊也。曹參守法而漢以之安、商君變法而秦以之弊。故上經云、智慧出有大僞是也（『取』第六十五章「故以智治國、國之賊」10/23b/03）

下線部分は玄宗『御注』及び『玄德纂疏』・唐明皇等『集註』・『廣聖義』所引には見られない。一方、『廣聖義』には「義曰」（44/03a/01）として全く同文が見られる。『取』は『廣聖義』に依拠して玄宗注に続けて「義」文を引用した可能性が高い。

唐明皇曰、玄、深也、妙也。人君常知所委任、是謂深遠玄妙至德也（『取』第六十五章「常知楷式是謂玄德」10/25a/05）

冒頭架線部のみが玄宗『御注』である。『廣聖義』はこの段を「疏。玄、深也、妙也。人君常能知此、則兩者爲楷式、是謂深遠玄妙之德」（44/05a/09）と引く。これは、『廣聖義』が前段「知此兩者亦楷式」で「玄宗注」として引くものと同文であり、『廣聖義』自体に錯簡の疑いが有る。しかし、『取』の内容は、むしろ、『廣聖義』所引「疏」に近い。『取』はやはり『廣聖義』に依拠した可能性が窺える。『取』が引く玄宗注には一部に他注釈が紛れている可能性が窺えよう。

（二）、成玄英

成玄英の注釈は『玄德纂疏』・顧『註疏』所引との対校が可能である。

而欲與天下同之、仁也。欲同之天下而先之侯王、義也。而學者顧見其言有絕棄仁義、則曰老君植提吾仁義而小之也、吾所不取。嗚呼、彼不見其所以絕棄之意、宜其不取焉爾（『取』第三十七章「吾將鎮之以無名之樸」05/35a/02）

「而脩之身爲眞～」以下は『藏室纂微』には見られず、呂『傳』（02/25b/09）に同文が見られる。やはり陳景元注と呂注の混乱が疑われる。

纂微曰…無爲之世、山無蹊隧、澤無舟梁、本絕往來、何所乘用（『取』第八十章「雖有舟輿、無所乘之。雖有甲兵、無所陳之」12/14a/04）

架線部を『藏室纂微』は「莊子曰、至德之世、山無蹊隧、澤無舟梁、萬物羣生、連屬其鄉、此之謂也」（10/16b/05）とする。『取』所引は、顧『註疏』八十一章が引く劉宋・張憑の注に全く同文が見られる（08/25b/09）。張憑注は「張君相集注」でも引かれ、当時一定程度流通していたことが窺える。

『取』所引「纂微曰」は基本的に『藏室纂微』と同系統で、彭『集註』所引「碧虛子陳景元曰」とは系統を異にする注文と目される。即ち、陳注自体に既に不安定さが生じている。加えて、『取』所引のみに見られる注文には、他注の混入が疑われる例が確認される。陳注としては、『取』所引「纂微曰」は相当程度留意する必要が有る。

（五）、陸佃

『取』所引陸佃注のほとんどは他に例を確認出来ない⁽¹³⁾。一條挙げると、

陸佃曰、性無生死、出則爲生、入則爲死（『取』第五十章「出生入死」08/09a/02）

本條は、蘇『注』同章及び彭『集註』所引「潁濱蘇轍曰」に同文が見られ、蘇轍注との間の混乱が疑われる。

その他、王安石、蘇轍、司馬光等の注釈を『取』は比較的多く引用するが、他の注釈書所引注とはほぼ一致していることから、考察は省略する。

二、唐代

（一）、玄宗

唐人の注釈で『取』が最も多く引くのは玄宗である。『取』が「唐明皇」と称して引く注釈のほとんどは玄宗「注」だが、一部に「疏」が混じる。玄宗『御註』、玄宗『御疏』の他、『玄德纂疏』・唐明皇等『集註』・顧『註疏』・

本段注は呂『傳』(01/18b/02～)とは全く一致しない。一方、呂『傳』と劉『集義』所引とは内容が一致している。即ち、『取』は呂『傳』とは別系のテキストに依拠していたことが考えられる。

『取』所引呂注は呂『傳』と基本的に一致しているが、注文が大きく異なる個所もあり、呂『傳』を基準とすれば、呂注にはテキストの乱れが生じていると言えよう。又、引用注文の冒頭或は末尾に李霖が自身の句を挿入した例も窺える。

(四)、陳景元

陳景元注を『取』は「纂微」と称して引く。『取』所引「纂微」は基本的には『藏室纂微』と同一系統であり、そこに若干の省略・補足が加えられたものである。一方、彭『集註』が「碧虛子陳景元曰」として引く注文は別系と⁽¹²⁾考えられる。

纂微曰、此三能之近道也、水性滋潤利澤萬物、故曰善利、此一能也。方圓任器、壅決隨人、故曰不爭、此二能也。衆人惡卑、水性趨下、此三能也。夫水利物、則其仁廣大、不爭則其德謙光、處惡則其量忍垢。舉水性之三能、唯至人之一貫德行如斯、去道不遠、故曰近爾(『取』第八章「水善利萬物、……故幾於道」02/1b/04)

『藏室纂微』及び劉『集義』・彭『集註』所引と比較すると、『取』所引は『藏室纂微』・劉『集義』所引と共通する部分が比較的多く、それを『取』は適宜省略している。「方圓任器、壅決隨人」の句は『取』のみに見られるが、『玄德纂疏』が同章に引く成玄英疏に「又不爭水性柔和、不與物爭、方圓任器、壅決隨人」(02/19a/06)と見られる。何らかの原因で成疏が混入していることが考えられる。

纂微曰……恍者有之疑於無、惚者無之疑於有、道之爲物、非有非無、不可定名、故曰惚恍(『取』第十四章「是謂無狀之狀、無物之象、是謂惚恍」03/03a/06)

架線部分は『藏室纂微』とは全く異なる。『取』の句は唐明皇等『集註』が同章で引く王雱注に「忽者有之疑於無、恍者無之疑於有。道之爲物、非有非無、不可定名」(02/29b/05)と同文が見られ、テキスト上の混乱が疑われる。

纂微曰、聖人之德化、常善救人、假有不從其化。而脩之身爲眞、而以脩之天下爲普、使王侯者知而守之則脩之、天下不亦普乎。夫不齎其道、

王雱注は『取』所引と唐明皇等『集注』所引の間で細かい文字の違いは有るものの、全体として見ればそれ程大きな混乱は無いと考えられる。しかし、李霖自身の句が挿入されている可能性が窺え、その点は留意すべきである。

(三)、呂惠卿

呂惠卿注を『取』は「呂吉甫曰」と称して引く。呂『傳』及び劉『集義』所引呂注と比較すると、『取』所引は呂『傳』とかなりの程度で一致しており、李霖が目撃した呂注は呂『傳』とほぼ同じ内容であったと推測される。

呂吉甫曰、……太初有無無有、無名無無、則一亦不可得無名、則一之所起有一而未形。則所謂天地之始是也。既已謂之一、且得無名乎。此物得之以生、而謂之德也。則所謂有名萬物之母、而萬物得一以生者是也

(『取』第一章「無名天地之始、有名萬物之母」01/02b/10)

「則所謂天地之始是也、既已」の句は呂『傳』・劉『集義』所引では「既」とのみあり、『取』所引は『道德經』正文を挿入した内容となっている。又、注末の「且得無名乎～」以下は呂『傳』・劉『集義』所引には無く、これ等は李霖のコメントである可能性が高い。

呂吉甫曰、力持而滿之、未必富者也。持所以防溢而盈之、則重溢也。如欲勿溢則如勿盈(『取』第九章「持而盈之、不如其已」02/05b/06)

「力持而滿之、未必富者也」の句は呂『傳』・劉『集義』所引には無く、「持所以防溢～」以下が共通することから、冒頭の句は李霖が補足した可能性が疑われる。⁽¹¹⁾

呂吉甫曰、情度而入之、求必貴者也。揣所以慮失而銳之、則重失也。如欲勿失則如勿銳(『取』第九章「揣而銳之、不可長保」02/06a/02)

呂『傳』・劉『集義』所引には冒頭の「情度而入之、求必貴者也」の句は無い。この句は劉『集義』同章が引く劉巨濟注に「情度而入之、求必貴者也」(14/11a/02)と同文が見られる。李霖が劉巨濟の注文を挿入したか、依拠した呂注に混乱があったと思われる。

呂吉甫曰、庖丁解牛、怵然爲戒、視爲止、行爲遲、動刀甚微、則豫若冬涉川者也。豫則圖之於事之始也。譟然已解、如土委地、提刀而立、爲之四顧、爲之躊躇滿志、善刀而藏之、猶若畏四鄰者也。猶則慎之於事之終也(『取』第十五章「豫、若冬涉川、猶若畏四鄰」03/5b/06)

(二)、王雱

王雱注を『取』は「王元澤曰」と称して引く。王雱注の完本は現存せず、唐明皇等『集註』・劉『集義』・趙『集解』・彭『集註』等が引く。これらと比べると、『取』所引は唐明皇等『集註』所引と基本的に一致し、劉『集義』所引も『取』と多く一致している。

王元澤曰、數字作入聲、輿字爲譽字、說曰、知一者以賤爲本、而内韜至貴（『取』第三十九章「故致數輿、無輿」06/12b/09）

架線部は唐明皇等『集註』所引には無い。『取』がこの直前に引用する唐・玄宗注にも類似の表現が見られるが、玄宗『御註』及び『玄徳纂疏』・唐明皇等『集註』・『廣聖義』所引玄宗注にはこの句は無く、李霖の付加部分と思われる。『取』には他にも「～字説曰～」等の句が数例見られる。

- (1) 唐明皇曰、數字作上聲、譽字作輿字、說曰、數輿則無輿、輪轅爲輿本（『取』第三十九章「故致數輿、無輿」06/12b/04）
- (2) 此作容字、說若東郭順子正容悟物、使人之意也消。故田子方師仰之。此作客字、說若李含光居於暗室、如對君父、故司馬子微激賞之（『取』第十五章「儼若客」03/06b/04）
- (3) 字説曰、奐而散爲渙。夫水本無冰、遇寒則凝（『取』第十五章「渙若冰將釋」03/07a/03）
- (4) 字説曰、屋梁兩端、乘實如之。物之強者、莫如梁（『取』第四十二章「強梁者不得其死」07/14b/05）

(2) は文意が比較的明確であり、「(正文を)「容」とする立場の説は……、(正文を)「客」の字とする立場の説は……」の意であろう。これを踏まえるならば、三十九章注は「數字は入聲である。輿字を譽字とする立場の説は……」となり、(1) も「數字は上聲である。譽字を輿字とする立場の説は……」の意と考えられる。しかし、(3)(4) は明らかに「字説」なる文献からの引用と目される。「字説」と称される文献には、王安石『字説』、唐耜『字説集解』等が有る⁽⁹⁾。『道德經』注釈には、「故字説曰、義者我也」（江『疏義』08/06b/01）、「臨川王安石曰、字説沖氣以天一爲主」（彭『集註』11/10a/04）、「字説、王育曰、天屈西北爲無」（劉『集義』01/19a/02）、「字説、玄而覆入之者玄也」（『同』01/20b/10）等の例が見られ、(3)(4) は『取』が『字説』から引用した可能性が高い。何れにしても三十九章の王雱・玄宗の注には李霖の手が加えられていることになる。

事遂、百姓謂我自然」03/16b/04)

「居」の字を『宋徽宗禦解』・章安『解義』・江『疏義』は「俗」とする。「居」と「俗」が入れ替わるのは、『取』が八十章に引く「呂吉甫注」(『取』12/02b/01)と呂『傳』との間にも見られ、これは、『道德經』八十章の正文自体に「安其居、樂其俗」と「安其俗、樂其業」の二系があり、『取』は前者に、『宋徽宗禦解』・章安『解義』・江『疏義』・呂『傳』が後者に属することに原因する。即ち李霖の引用ミスではなく、基づいたテキストの問題である。第二十一章注に見られる「杳」(『取』04/02b/04)を『宋徽宗禦解』・章安『解義』・江『疏義』が「窈」とする事例も同様である。

御註。保其精神、而不以外耗内者、畜也。精神四達、並流而無所不極、上際於天、下蟠於地、化育萬物、其名爲同帝、人之所以爲人、天之所以爲天者也。唯畜也、愛養精神、然後俯治人仰事天、故曰治人事天莫若畜(『取』第五十九章「治人事天、莫若畜」09/22a/04)

本條該当個所の『宋徽宗禦解』及び章安『解義』・江『疏義』・彭『集註』所引注文は全く異なる。『取』所引注冒頭の「保其精神、而不以外耗内者、畜也」の句は、唐明皇等『集註』が引く王雱注に「葆其精神、不以外耗内者畜也」(08/27b/06)と見られ、『莊子』「刻意」を踏まえる「精神四達」以下の句は呂『傳』に「精神四達、並流而無所不極、化育萬物、其名爲同帝、則人之所以爲人、而天之所以爲天者也」(03/29a/04)と見られる。更に、「愛養精神」以下の句は、彭『集註』が同章で引く陸佃注に「蓋畜精養神、然後可以俯治人而仰事天、故曰治人事天莫如畜」(14/11a/07)と同文が見られる。即ち、標準的徽宗注には無いこの注文は、北宋の諸注を繋ぎ合わせたものに相当する。李霖が基本的に徽宗注に忠実であることを踏まえれば、これ等他注を取って徽宗注とする理由も考えにくい。恐らくは、李霖が依拠した徽宗注がこの様な内容であったと考えられる。

『取』所引徽宗注は『宋徽宗禦解』と基本的に一致し、より細かく言えば江『疏義』所引注文に近い。テキストとして比較的安定しており、李霖は当時流通していた徽宗注を忠実に引用していたと言える。『宋徽宗禦解』と異なる注文が僅かに見られたが、それは李霖が基づいたテキスト自体の問題であり、彼の誤り、或は臆断による改筆ではないと考えられる。

う。仮に『取』が北宋末の編纂であったとしても、『取』を介して金人が受容した諸注の状況を窺うことが可能である。

李霖が注釈原典から直接引用したのか、それとも「集注」の類から転引したのかの確認は困難だが、常識的に判断すれば、李霖の時代に近い注釈ほど、或いは引用回数が多い注釈ほど、直接原典に依拠していた可能性が高いと言えよう。李霖が引く諸注の中で、徽宗、王雱、呂惠卿の三注の引用が特に多く、特に徽宗注の引用数は突出している。これら三注は各巻に於いて相当数引用されていることから、原典から直接引用した可能性が高い。⁽⁶⁾

以下、李霖の活動時期に近い宋代の注釈の検討から始め、唐代、六朝以前と遡っていくが、集注の類に通常見られる転引の際の誤り、字句の省略・付加等の指摘は原則省略し、特に留意すべき注文のみの指摘に留める。又、『取』所引注文と比較対校可能な注文を他に確認出来ない場合も省略した。⁽⁷⁾

一、北宋注釈

(一)、徽宗

『取』は徽宗注を「御註」と称して引用する。『宋徽宗禦解』を基準として見た場合、『取』はかなりの精度で徽宗注を引用していることが分かる。又、その注文は、章安『解義』・江『疏義』とも共通し、三書収録の徽宗注は同系統で、『取』は基本的にこれらに忠実であると考えられる。

御註。自本自根、自古以固存、火之傳、不知其盡也（『取』第六章「用之不勤」01/21a/07）

「火之傳」の句は、『宋徽宗禦解』・章安『解義』には無く、江『疏義』には『取』と同句が見られ、劉『集義』には「如火之傳」（11/06b/02）と見られる。『取』・江『疏義』・劉『集義』の句は後から付加された可能性が高い。

御註。……刑獄者、相望也（『取』第五十章「夫何故、以其生生之厚」08/10a/07）

「獄」は『宋徽宗禦解』・章安『解義』では「戮」となっているが、江『疏義』も「獄」とする。この二條に見られる様に、『取』所引注が『宋徽宗禦解』と異なる場合でも、江『疏義』所引と一致する例が多い。江『疏義』は徽宗頃の編と推測され、⁽⁸⁾『取』が江『疏義』系注文に依拠した可能性が考えられる。

御註。……使人甘其食、美其服、安其居、樂其業（『取』第十七章「功成

金朝『道德經』注釈資料としての 李霖『道德眞經取善集』について

山田 俊

序

12～13世紀の北方中国に位置した金朝で受容されていた道家道教文献の実態に就いては、例えば『玄都寶藏』の概略が紹介されること等⁽¹⁾は有っても、個々の具体的文献の検討となると、ほとんど未着手に等しい。しかし、北宋以降の近世道家道教思想史、或は金朝後半に発生した全真教等の新たな道教の思想基盤を正確に理解するためにも、金朝全体を射程に入れた個々の文献の当時に於ける流布状況を検証することは不可欠と言えよう。かかる見通しの下、本論では金人・李霖の『道德眞經取善集』について検討してみたい。

李霖『道德眞經取善集』（『道藏』所収。以下「『取』」と略す）は、既に散佚した『道德經』諸注を引用することから、『道德經』注釈史上貴重な文献である。⁽²⁾しかし、『取』所引諸注の「質」が問われたことは、寡聞にして無い。李霖が目撃した注釈が如何なるものであったのか、どの程度^{オリジナル}に忠実であり、信用に足るものなのか、これ等は是非とも確認しなければならない。李霖『取』の思想的立場は別稿に譲り⁽³⁾、本論では『道德經』注釈資料としての面に焦点を当てて考えることとする。

李霖の詳細は不明である。『取』に寄せられた河間・劉允升の「序」から、その出自が饒陽、字は宗傅、王賓なる旧友がいたことのみ知られる。その劉「序」が「大定壬辰」（『取』序/02a/10）、即ち金世宗大定十二年（1172）に書かれていることから、李霖も金人、或は宋の遺民と推測される。更に、李霖自序が「饒陽居士李霖」（『取』序/03a/09）と言う所の饒陽は現在の河北省衡水市に相当し、金の天会四年（宋靖康元年・1126年）に金の領土となったことから⁽⁴⁾、李霖も金朝領土内で活動していた人物の可能性が高い⁽⁵⁾。即ち、『取』が引く諸注は当時の金朝領内で流布していた『道德經』注釈資料と見做すことが出来、そこから当時当地の道家文献の受容状況の一斑を知ることが出来よ